九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

スペイン語の名詞述語における無冠詞について：「人」を主語とするser文を中心にして

山村，ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1456025

出版情報：言語文化論究. 32, pp.21-38, 2014-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

スペイン語の名詞述語における無冠詞について
――「人」を主語とする ser 文を中心にして――*

山　村　ひろみ

1．はじめに

本稿が扱う現象は、以下のような、スペイン語の「人」を主語とする ser コピュラ文（以下、ser 文）[1] の名詞述語における冠詞、特に、不定冠詞の有無についてである[2]。

(1)　Hola, me llamo Hanako Yamada.　　a. Soy estudiante de español.
　　b. # Soy una estudiante de español.
　　こんにちは、私は山田花子っていいます。　　スペイン語の学生です。

（1）はスペイン語の初心者が学ぶ典型的な自己紹介文である。*Hola, me llamo...*「こんにちは、私は…といいます」という名乗りの後に、職業や身分、国籍を表す ser 文が続いたものであるが、（1a）が示すように、その名詞述語の名詞句[3] は無冠詞になり、（1b）のように不定冠詞 *una* をつけると不自然になる[4]。日本におけるスペイン語学習者のほとんどは英語の知識を持っているので、（1a）のような文に出会うと、スペイン語ではなぜ英語の I am a student of Spanish のように「学生」を表す名詞の前に不定冠詞がつかないのかという素朴な疑問を抱くことが多く、実際、筆者は毎年その質問に答えなければならない立場にある。なるほど、そのような初心者の質問に対しては複雑な説明は避け、単に「スペイン語は英語とは違う」と答えるだけでよいという考えもあろうが、質問者の中にはそのような返答に満足しない者もいる。また、何よりも、この「人を主語とする ser 文の名詞述語における無冠詞」という現象は、次の例が示すように、必ずしも常に起こるわけではない。

(2)　Soy asiduo lector de “La Vanguardia”, y leo con atención, diariamente, los muy variados artículos que en las páginas de Opinión se publican periódicamente.（CREA[5] La Vanguardia, 30/10/1995 : CARTAS DE LOS LECTORES.）
（私は “La Vanguardia” の熱心な読者で、定期的に「意見」のページに掲載される非常にバラエティに富んだ記事を毎日注意深く読んでいます。）

(3)　Soy un asiduo lector de EL PAÍS, hábito acentuado en estos días tras los atentados de Madrid del 11-M.（CREA El País, 01/04/2004 : Soy un asiduo lector）
（私は “El País” の熱心な読者ですが、その習慣は 11-M に起こった Madrid のテロ事件以来際立ってきています。）

(2) と (3) はどちらもスペインの新聞に掲載された投書の冒頭文であるが、(2) の「私は ... の熱心な読者である」というコピュラ文は *Soy asiduo lector de...* のように無冠詞であるのに対し、(3) では *Soy un asiduo lector de...* のように、「熱心な読者」を表す *asiduo lector* という名詞句の前に不定冠詞 *un* が付加されている。この (2) と (3) の違いから「人を主語とする ser 文の名詞述語における無冠詞」は必ずしも常に起こるわけではないということが分かる。しかし、そうなると、当該 ser 文の名詞述語に冠詞がつく場合とつかない場合の違い、より広くには、限定詞がつく場合とつかない場合の違いは何かということが問題になってくる。

そこで、本稿は次のことを目指す。まず、スペイン語教育という観点から、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞になる場合と不定冠詞を始めとする何らかの限定詞がつく場合の違いを先行研究の指摘を基に明らかにする。そして、その結果に基づきながら、スペイン語初心者に対する同現象の分かりやすい説明方法を提示する[6]。次に、「人」を主語とする ser 文の名詞述語の特徴、すなわち、それが「物」を主語とする ser 文の名詞述語とは異なり無冠詞で出現することができるのはなぜか、という問題を検討していく[7]。

2．先行研究

周知のように、スペイン語名詞句における冠詞の有無はスペイン語学の中でも常に問題となってきたもので多くの先行研究がある。本節では、その中から、特に、ser 文の名詞述語における冠詞の有無を扱う際に必ず言及されるものを中心に概観していく[8]。

2.1. A.Alonso (1933), Lapesa (1975)

まず、古典的な先行研究として、A. Alonso（1933）と Lapesa（1975）をあげることができる。

A. Alonso (1933) は、冠詞、指示形容詞、所有形容詞、数量詞といった限定詞のことを actualizador（現前化詞）と呼び、それらが付加された名詞句は con actualizador（現前化詞あり）、それらが付加されていない名詞句を sin actualizador（現前化詞なし）とした上で、「限定詞なし」の名詞句は virtual, categórico o esencial（仮想的、カテゴリー的あるいは本質的）なのに対し、「限定詞あり」の名詞句は actual, individuado, referido a lo existente（アクチュアル、個別的、実在のものに言及したもの）であるという形で両者を対立させた。

一方、Lapesa（1975）は、基本的に A. Alonso (1933) を踏襲しながらも、「限定詞なし」は clasificación（分類）、「限定詞あり」は identificación（同定）を表すとし、それぞれを次のように説明している。

> "La CLASIFICACIÓN incluye el sujeto en una categoría; indica que pertenece a ella o lo valora según ella. El predicado se configura como entidad ideal, como clase y no lleva actualizador: (...) La IDENTIFIACIÓN opera relacionando entre sí dos términos individualizdos; el predicado, designación de una persona o cosa dada, lleva entonces actualizador: 《Sansón Carrasco es *ese bachiller* que interviene en la Segunda Parte del *Quijote*》; 《Herrera fue *el arquitecto* de El Escorial》; 《[el Prior] era *un hombre* arrogante y erguido》 (Valle-Inclán, Jardín unbrío, ed. 1942, 32) En todos estos ejemplos, la categoría está vista como realidad actualizada en uno de los individuos que pertenecen a ella." (Lapesa 1975: 126-127)

(「分類」は主語をあるカテゴリーに入れる。つまり、それがそのカテゴリーに属す、あるいは、

それをそのカテゴリーに従って評価することを示す。その述語は理想的実体、類として構成され（se configura）、限定詞は伴わない。（中略）「同定」は個別化された２つの語を互いに関係づける。そして、ある人、あるいは、所与の物の指名（designación）である述語はそのとき限定詞を伴う。《サンソン・カラスコはドン・キホーテの第二部に登場するその学士である》;《エレーラはエル・エスコリアルの建築家だった》;《（エル・プリオル）彼は傲慢でいばった男だった》これらの例では、カテゴリーはそれに属す個人のひとりにおいてアクチュアル化された現実と見なされている。）

以上の A.Alonso（1933）と Lapesa（1975）の解釈に従えば、無冠詞の名詞述語は ser 文の主語である人のタイプや類を表し、何らかの限定詞がついた名詞述語は当該人物がそのタイプや類の具現化であることを表すということになるが、スペイン語の学習者がこのような説明を容易に理解できるかどうかははなはだ疑問である。

2. 2. Fernández Lagunilla（1983）

次に、Fernández Lagunilla（1983）を見る。Fernández Lagunilla（1983）は、ser 文の名詞述語に出現する不定冠詞の中でも、特に、「強意の不定冠詞（*un* enfático）」と呼ばれるものに焦点をあてたものであるが、A. Alonso, Lapesa 以後の「無冠詞」研究の展開を紹介し、それらを批判的に検討した点で、本稿にとって大いに参考になるものである。

まず、Fernández Lagunilla（1983）は、「人」が主語の ser 文における無冠詞と不定冠詞の交替を Bello（1847）[9], A. Alonso（1933）, Lapesa（1975）といった伝統文法がどのように解釈してきたかを紹介した後、次のような文をあげている。

（4） ?? Mi marido es <u>un médico</u>[10].
私の夫は医者だ。

（4）は特別の文脈がない限り不自然な文である。Fernández Lagunilla によると、S. de Zavala（1976:213-214）はこの文を *“el caballo es {<u>un/*ϕ</u>} <u>animal</u>* 馬は動物だ” という文と比較し、次のように説明しているという。

“La presencia de *un* sería obligatoria cuando el SN sujeto designa un subconjunto propio del conjunto definido por el SN predicado de la oración; en cambio, estaría excluida cuando los dos SNs pertenecen a dos subconjuntos que se caracterizan independientemente en el conjunto de los hombres. “（de Zavala 1976:213-214 en Fernández Lagunilla 1983:198）
（主語の名詞句が当該文の名詞述語によって定義された集合に特有の部分集合を示すとき、un の存在は義務的になる。一方、２つの名詞句（主語の名詞句と述語の名詞句、山村注）が人の集合において独立的に特徴づけられる二つの部分集合に属しているとき、不定冠詞は排除される。）

S. de Zavala によれば、*“el caballo es {<u>un/*ϕ</u>} <u>animal</u>”* において不定冠詞が義務的なのは *caballo*（馬）が *animal*（動物）の *subconjunto*（部分集合）であり、*“mi marido es {??<u>un/*ϕ</u>} <u>médico</u>”* が無冠詞になるのは、*mi marido*（私の夫）と *médico*（医者）が互いに独立した人の部分集合だからということになる。しかし、Fernández Lagunilla によれば、この S. de Zavala の説明は以下の言語事実を説明できない。

(5) a. Mi marido es un médico que ha luchado por lo que quería.
私の夫は自分が欲することのために闘った医者である。
b. Mi marido es un médico estupendo.
私の夫はすばらしい医者である。
c. Mi marido es médico de la Seguridad Social.
私の夫は社会保険の医者である。 (Fernández Lagunilla 1983:198-199)

(5a)(5b)が示すように、「人」が主語の ser 文の名詞述語が関係詞文あるいは特定の形容詞によって修飾されると、当該述語には不定冠詞が必要になる。しかし、Fernández Lagunilla は、このことは、(5a)の *mi marido* が médicos que han luchado por lo que querían（自分が欲することのために闘った医者たち）という集合の部分集合であること、また、(5b)の *mi marido* が médicos estupendos（すばらしい医者たち）という集合の部分集合であることを意味しないという。また、(5c)のように、当該名詞述語が形容詞句によって修飾されていても不定冠詞がつかないこともある。以上のことから、Fernández Lagunilla は、「人」が主語の ser 文の名詞述語における不定冠詞の有無は S. de Zavala の解釈ではうまく説明できないと断じるのである。

一方、Fernández Lagunilla によれば、Lipski（1978:107）は、「人」が主語の ser 文の名詞述語における不定冠詞の有無を "involving the semantic features of inherent trait versus consciously acquired characteristics" に還元しているという。しかし、Fernández Lagunilla はこの Lipski の解釈も上で見た S.de Zavala（1976）と同様、"*Juan es* {*un*/*ϕ*} *médico chiflado* フアンは頭のいかれた医者だ" のように、形容詞の付加された名詞述語における不定冠詞の義務的付加は説明できないとする。

さらに、Fernández Lagunilla は、B.L.Velleman（1979:308）のように、当該 ser 文の無冠詞の名詞述語は masa（総体）、不定冠詞つきの名詞述語は individuo（個体）を表す、という解釈も支持できないという。なぜならば、もしそのような解釈が正しければ、(5c)は "un médico de la Seguridad Social" のように不定冠詞つきになるはずだからである。

このように Fernández Lagunilla の目からみると、A. Alonso（1933）、Lapesa（1975）以後に提示された研究のいずれも、「人」が主語の ser 文の名詞述語における無冠詞と不定冠詞の交替はうまく説明できないということになる。それでは、Fernández Lagunilla 自身はこの現象をどのように説明しているのであろうか。以下を参照されたい。

"[p] arece que la estructura copulativa con *un* no responde a una clasifiación o caracterización objetiva, sino a una apreciación subjetiva del hablante; de ahí la resistencia de los sustantivos que designan profesiones a emplearse con *un*, frente a la total aceptación de los sustantivos que han desarrollado un contenido afectivo o han adquirido un sentido figurado." (Fernández Lagunilla 1983:201)
(un を伴ったコピュラ構造は客観的分類あるいは特徴づけに対応したものではなく、話者の主観的評価に対応したものである。そのため、職業を示す名詞は un と共起するのに抵抗するのに対し、情緒的な内容を展開させた名詞、あるいは、比喩的意味を獲得した名詞は完全に un との共起を受容するのである。)

この Fernández Lagunilla の見解によれば、「人」が主語の ser 文の名詞述語における不定冠詞の有無は話者の主観的評価の有無に対応したものということになるが、彼女はその証拠として次のような例をあげている。

(6)　a.?? Juan es un médico.　フアンは医者だ。
　　b. ? Juan es un comunista.　フアンはコミュニストだ。
　　c.　Juan es un fascista.　フアンはファシストだ。　(Fernández Lagunilla 1983:199)

Fernández Lagunilla (1983:199) によれば、(6a) で不定冠詞の付加が不自然なのは *médico* が単に職業を表す名詞であるからで、一方、(6c) の *fascista* (ファシスト) の不定冠詞の付加が自然なのは、*fascista* が話者の対象に対する何らかの評価、例えば、高圧的で傲慢といった、指示対象である人物に対するネガティブな評価を表すからということになる。しかし、このような、ser 文の名詞述語における無冠詞の生起を話者の主観的評価の有無に結びつける Fernández Lagunilla の解釈にも問題がある。というのも、(7) のような *"¿ Quién es Juan?* フアンって誰 " という問いの答えになる ser 文では必ず不定冠詞が出現するのだが、この不定冠詞は必ずしも話者の対象に対する評価を表したものとはいえないからである。

(7)　¿ Quién es Juan ? —— Juan es un abogado.
　　フアンって誰。　フアンは弁護士だ。　(Fernández Lagunilla 1983:198)

2.3. Bosque (1996)

次に、Bosque (1996) を見る。これは今のところスペイン語の「限定詞なし」の名詞句に対するもっとも充実した論文で、本稿が対象とする ser 文の名詞述語の解釈のみならず、主語、直接目的語といった文の項 (argumento) として出現する「限定詞なし」の名詞句までを対象にしながら、それらがこれまでどのように解釈されてきたか、また、その解釈の背景にある理論的枠組みは何かなどを簡潔に解説したものである。この論文の中で Bosque は、まず、以下のような例をあげ、その解釈を述べている。

(8)　a. Este hombre es escritor.　この人は作家だ。
　　b. Este hombre es un escritor.　この人は作家だ。

"Suele decirse que en (46a=8a) tenemos una predicación nominal de tipo clasificativo (se nos informa sobre la clase en que se inscribe a Juan (sic[11])) mientras que en (46b=8b) se identifica a un individuo. La primera oración podría contestar adecuadadmente a la pregunta *¿ Qué es este hombre ?*, puesto que en dicha oración se asigna a Juan (sic) una propiedad. No sería posible, por el contrario, contestar con ella a la pregunta *¿Quién es este hombre ?*, frente a lo que ocurre en el segundo caso. En (46b=8b), el atributo *un escritor* nos permite reconocer a Juan (sic) como uno de los individuos de los que se predica la propiedad de ser escritor" (Bosque 1996:57)
(一般に、(46a, 本稿の8a) にあるのは (Juan (ママ) が登録される「類」の情報を与える)「分類」タイプの名詞述語であり、一方、(46b, 本稿の 8b) では、ある個人が同定されている、と言われる。最初の文は "*¿ Qué es este hombre ?* この人は何か (この人は何をしている人か)[12]" という質問に対する適切な答えになることができる。なぜなら当該文では Juan (ママ) にある属性が付与されているからである。反対に、"*¿Quién es este hombre ?* この人は誰か" という質問に対して同文で答えることは不可能だろう。一方、二番目の文はその答えになる。(46b) では、*un escritor* (作家) という属詞によって Juan (ママ) が「作家である」という属性を持つ個体のひとつとして認

識されるのである。）

Bosque の解釈によれば、「人」が主語の ser 文の名詞述語が無冠詞になるのは、それが *"¿Qué es este hombre?* この人は何か" といった問いに対する答えになる場合で、当該文の *escritor*（作家）は主語 *este hombre*（この人）の属性を表す。一方、(8b) のように名詞述語に不定冠詞が付加されたものは、*"¿Quién es este hombre?* この人は誰か" という問いに対する答えになる場合で、*un* の存在により、*este hombre* は *ser escritor*（作家である）という属性が叙述される individuos（個体）のひとつとして認識されることになるのだという。この Bosque の解釈は、基本的に、最初に見た A. Alonso（1933）や Lapesa（1975）の clasificación（分類）と identificación（同定）の区別に類似したものである。

他方、Bosque（1996）の特筆すべき点は、Fernández Lagunilla が指摘した問題、すなわち、当該名詞述語に形容詞句あるいは前置詞句からなる修飾句が付加された場合、無冠詞のままのこともあれば不定冠詞が義務的に付加されることもあるという点について、その違いは修飾句の性質の違い、つまり、無冠詞のままの場合は、当該修飾句が clasificativo（分類的）あるいは relacional（関係的）なものであり、不定冠詞が付加される場合は、当該修飾句が主語の示す個体の属性を示すような場合である、と明示したところにある。以下を参照されたい。

"la diferencia apuntada permite entender que resulte preferible construir oraciones como (46b=8b) con modificadores restrictivos (...), puesto que son estas informaciones las que nos permitirán《identificar》propiamente a su sujeto. En las oraciones del tipo de (46a=8a), por el contrario, los adjetivos que normalmente se admiten son clasificativos o relacionales, es decir, aquellos que ayudan a delimitar subclases de entidades en lugar de proporcionar propiedades de los individuos. Esta diferencia está en la base de contrastes como los que siguen." (Ibid.)

（上記の違い（無冠詞名詞述語 ser 文は主語の「分類」を、不定冠詞つき名詞述語 ser 文は主語の「同定」を示すということ、山村注）から、(46b, 本稿の8b）のような文は制限的修飾語とともに構成するのが望ましくなるというのが分かる。なぜなら、まさにその情報によって、当該主語を適切に「同定」することが可能になるからである。(46a, 本稿の8a）のタイプの文においては、逆に、許容される形容詞は分類的あるいは関係的なもの、すなわち、個体（individuos）の属性を示すのではなく、実体（entidades）の下位分類を限定するのに役立つものとなる。この違いは、以下のような対照の基となるものである。

(9) a. Es <u>entrenador diplomado</u>. 彼は資格のあるトレーナーだ。
　　b. Era <u>ciudad universitaria</u>. それは大学都市だった。
(10) a. *Es <u>entrenador malhumorado</u>. 彼は怒りっぽいトレーナーだ。
　　b.?? Era <u>ciudad aburrida</u>. それは退屈な都市だった。）

Bosque によれば、(9a) の *diplomado*（資格のある）、(9b) の *universitaria*（大学の）は関係的な形容詞で当該名詞が示す実体の下位分類を表すが、このような関係的形容詞が付加された名詞述語には不定冠詞はつかない。一方、(10a) の *malhumorado*（怒りっぽい）、(10b) の *aburrida*（退屈な）は当該名詞の表す個体の属性を表したもので、そのような修飾句と共起した名詞述語には不定冠詞の付加が義務的になる。この Bosque が指摘した「人」を表す名詞に付加される形容詞句の意味的

および統語的違い[13]に従えば、「人」を表す名詞を主語とする ser 文の名詞述語における限定詞の有無はかなり明確に整理されることになるだろう。実際、Fernández Lagunilla（1983）が問題とした *"Mi marido es un médico estupendo* 私の夫はすばらしい" と *"Mi marido es médico de la Seguridad Social* 私の夫は社会保険の医者だ " における不定冠詞の有無も、確かに、Bosque が指摘した形容詞句の性質の違い、すなわち、前者の *estupendo*（すばらしい）は指示対象の属性を表す品質形容詞であり、後者の *de la Seguridad Social*（社会保険の）は関係形容詞句であることに因ると考えることができるからである[14]。

２．４．まとめと問題点

さて、以上の先行研究を踏まえ、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞になる場合と不定冠詞をはじめとする限定詞がつく場合の違いをまとめるならば、以下のようになるだろう。

スペイン語教育という観点から両者の違いを分かりやすく解説するならば、次のように、Bosque が提示した（8a = 10a）（8b = 10b）の例およびそれに対する解釈を利用するのがよいと思われる。

(10) a. ¿ Qué es este hombre ?　—— Es escritor.　CLASIFIACIÓN O PROPIEDAD
この人は何か（この人は何をしている人か）。　作家だ。　（分類あるいは属性）
b. ¿ Quién es este hombre ?　—— Es un escritor.　IDENTIFIACIÓN　（同定）
この人は誰か。　作家だ。

まず、スペイン語の職業・身分等を表す ser 文の名詞述語が無冠詞になることについて疑問を持つ学習者には、上の (10a) (10b) が示すように、無冠詞の ser 名詞述語文と不定冠詞つきの ser 名詞述語文では前提とする疑問文が異なるということを明示することが肝要であろう。*"Es escritor ...* は作家だ"、*"Es un escritor ...* は作家だ" という二文をいかに詳細に説明しても、その日本語訳に大きな違いが見られない限り、彼らに両者の違いを正しく認識させるのは難しいと思われるからである。それに対して、*"¿ Qué es este hombre ?* この人は何か"、*"¿Quién es este hombre ?* この人は誰か" という疑問文の違いは、どんな学習者にも容易に理解されるに違いない。そうだとすれば、無冠詞の ser 文と不定冠詞つきの ser 文の意味的違いを学習者に認識させる際には、問題となる ser 文だけを提示するのではなく、ぜひその ser 文が答えとなるような問いも合わせて提示すべきだと考える。

一方、特に、不定冠詞つき名詞述語の ser 文については、次の例が示すように、それがその他の限定詞つき名詞述語の ser 文と同じ環境で出現するという点に注目させることも重要である。そうすることにより、その意味特徴を学習者に確認させることができるからである。

(11) ¿Quién es Juan? ——　a. Es el marido de Pili.　ピリの夫だ。
フアンって誰。　b. aquel tío alto.　あの背が高い奴だ。
c. un vecino.　お隣さんだ。
d. un médico.　医者だ。

(11) の *"¿Quién es Juan?* フアンって誰" という問いに対する答えは、(11a) から (11d) が示すようにいろいろなパターンがあるが、どれも無冠詞ではないという点で一致する。また、(11b) の答えから、学習者は *"¿Quién es Juan?"* という問いが日本語の「フアンってどの人」に相当する意味を持つということも了解するだろう。つまり、*"¿Quién es Juan?"* という疑問文は *Juan* と名付けら

れた「対象としてのヒト」（以下、ヒトと略記）を他のヒトと区別し、同定するために発せられるもので、不定冠詞つきの名詞述語は、それに対する答えのひとつとして出現することができるということなのである。それに対し、（10a）の *“¿ Qué es Juan ?* フアンは何か（フアンは何をしている人か）” に対する答えにはバリエーションはなく、その答えである名詞述語の ser 文は、通常、無冠詞になる。

このように見てくると、最初に見た例文（1）において不定冠詞のついた名詞述語が不自然になる理由も自ずと分かってくるだろう。

（12）（=1） Hola, me llamo Hanako Yamada.
こんにちは、私は山田花子っていいます。

a. Soy estudiante de español.
b.# Soy una estudiante de español.
スペイン語の学生です。

つまり、*“Hola, me llamo Hanako Yamada”* と自分の名前を名乗った後に、再び、主語の示すヒト（すなわち、自分）を「同定」する不定冠詞つき名詞述語の ser 文を発することは、語用論的に不自然なのである。しかし、これは、換言すれば、（1 b）の *“Soy una estudiante de español”* が *“¿Quién eres?*（君は誰）” のように主語の示すヒトの「同定」を求める問いに対する答えとしてならば、自然な文になるということでもある[15]。先に見た（2）（3）の違いは、そのような語用論的な違いに基づくものといえるであろう。

（13） a.（=2） Soy asiduo lector de “La Vanguardia”, (...)
私は “La Vanguardia” の熱心な読者です、（後略）
b.（=3） Soy un asiduo lector de EL PAÍS, (...)
私は “El País” の熱心な読者です、（後略）

（13a）と（13b）における不定冠詞の有無は、投書を投稿した人物が自己紹介するにあたりどのようなことを念頭においていたかの違いに因ると思われる。すなわち、投稿者が *“¿Qué soy yo?* 私は何か（私はどういう人か）” ということを伝えようとしたのであれば（13a）の無冠詞の名詞述語文になり、*“¿Quién soy yo?* 私は誰か” ということを伝えようとしたのであれば（13b）の不定冠詞つきの名詞述語文になるということである。

しかし、このように、主語が示すヒトの「分類」「属性」を表す名詞述語は無冠詞、その「同定」を表す名詞述語には限定詞がつく、とスペイン語学習者に説明できたとしても、それですべてが解決できたということにはならない。なぜなら、それでは、主語が示すヒトの「分類」「属性」を表す名詞述語はなぜ無冠詞で、その「同定」を表す名詞述語はなぜ無冠詞ではないのか、という新たな問いが生じるからである。この問いに対する答えとしては、以下の Bosque（1996）の指摘が参考になる。

“Los nombres comunes discontinuos – (...) —no denotan individuos y no poseen, por tanto, las propiedades que se esperan de las entidades argumentales. Definen <clases> o,<especies>（*kinds*）y no denotan entidades sino a través del determinante con el que se construyen.”（Bosque 1996:18）
（可算普通名詞は —（中略）— 個体は示さず、したがって、項の実体に期待される属性を持たない。それらは「クラス」あるいは「種類」（kinds）は定義するが、実体を示すのはそれと一緒に

構成される限定詞を介したときのみである。）

Bosque の解釈によれば、スペイン語の可算普通名詞は「クラス」ないし「種類」は定義するが、それ自体で individuo（個体）を示すことはなく、そのためには限定詞が必要となる、ということである。しかし、一方で、Bosque は次のようにも述べている。

“Supongamos, pues, que los sustantivos usados predicativamente como SSEE establecen la pertenencia del sujeto a una determinada clase. Si esta atribución fuera suficiente, la asignación de hiperónimos se haría sistemáticamente con SSEE, pero lo cierto es que no es así como se realiza.
（それでは、叙述的に無冠詞で用いられた名詞は主語がある特定のクラスに属すことを示すと仮定してみよう。もしこの帰属性が十分なものであるならば、上位語はシステマティックに無冠詞で示されることになろう。しかし、実際は、そうではない。）

（14） ??El rombo es paralelogramo/??La mariposa es lepidóptero/??Andrómeda es constelación /??Aquel objeto es mesa.”
ひし形は平行四辺形である / チョウは鱗翅目である / アンドロメダ座は星座である / あの物体は机である。）（Bosque 1996:58）

つまり、Bosque によれば、無冠詞の名詞述語が主語の指示対象の属す「クラス」を示すのであれば、（14）のように、その名詞述語が hiperónimo（上位語）の場合はシステマティックに無冠詞になるはずであるが実際はそうではない、というのである。この点に注目した Bosque は正しく、次のように指摘している。

“Si volvemos a los sustantivos discontinuos usados predicativamente se nos plantea el problema fundamental de dilucidar lo que opone（46a(=8a), *Este hombre es escritor*）a（49(=14)）.” （Bosque 1996:59）
（叙述的に用いられた可算名詞に戻るならば、（46a, 本稿の8a, *Este hombre es escritor* この人は作家だ）と（49, 本稿の14）を対立させるものが何であるかを解明するという基本的な問題が立てられることになる。）

確かに、無冠詞の名詞述語が主語の「クラス」を表すというのであれば、それは主語が「人」であれ「物」であれ、同様に起こるはずである。しかし、実際には、「人」が主語の *“Este hombre es escritor* この人は作家だ” は自然なのに対し、「物」が主語の *“Aquel objeto es mesa* あの物体は机だ ” は不自然である。このことから、Bosque は主語の違いによってなぜそのようなことが起こるのかを解明する必要がある、と指摘しているのである。そこで、次節では、Bosque が提示したこの問題をどう考えればよいのかを検討していきたい。

3．考　察

3.1.「物」を表す名詞と「人」を表す名詞：「対象弁別性」の有無

「人」が主語の ser 文の名詞述語は無冠詞になることができるのに対し、「物」が主語の当該文で

はそれが難しいということを考えるにあたっては、まず、主語となる「人」を表す名詞と「物」を表す名詞の本質的違いを考えなければならないだろう[16]。そのような観点から、両者を、特に、それが具体的に何を示すのかという点に注目しながら比較してみると、次のようなことが分かる。

まず、「物」を表す名詞はそれだけで、それ以外の「物」を表す名詞が示す「対象としてのモノ」（以下、モノと略記）とは異なるモノを示すことができる。例えば、libro（本）という「物」の名詞が示すことのできるモノは、mesa（机）や coche（自動車）という「物」の名詞が示すことのできるモノとは異なるということである。このような対象に対する名詞の弁別性をその「対象弁別性」と呼ぶならば、「物」を表す名詞はそれだけで「対象弁別性」があるということになる。この「物」を表す名詞の「対象弁別性」は、以下の例が示すように、それらが常に正体不明の対象を同定する問いの答えとして出現できるということによって示される。

(15) ¿Qué es esto? —— Es {un/*ϕ} libro/{una/*ϕ} mesa.
これは何か。　それは本だ / 机だ。

(15) が示すように、*"¿Qué es esto?* これは何か" に対する答えは無冠詞にはならない[17]。このことは、名詞の「対象弁別性」と不定冠詞などの限定詞が密接に関係していることを示唆するものである。

一方、「人」を表す名詞にはそのような「対象弁別性」はない。なぜならば、我々はあるヒトを estudiante（学生）という「人」を表す名詞で示すこともできれば、同時に、hijo（息子）、japonés（日本人）というその他の「人」を表す名詞で示すこともできるからである。つまり、「人」を表す名詞には、「物」を表す名詞のように、それだけでそれ以外の「人」を表す名詞が示すヒトとは異なるヒトを示すという機能はなく、それはただ同じヒトというカテゴリーに属す対象同士を区別する修飾語（calificativo）として働くだけなのである。このような「人」を表す名詞の特徴は、次の例によって確認される。

(16) a. ¿Qué es este hombre/él/ese tío/Juan? —— Es pintor y padre de dos hijos.
この人 / 彼 / そいつ / フアンは何か（何をしている人か）。彼は画家で二人のこどもの父親だ。
b. ¿Qué es esto? —— Es {un/*ϕ} pintor.
これは何か。　画家だ。

まず、「人」を表す名詞が必ず同じヒトというカテゴリーに属す対象を示すというのは、無冠詞の名詞が答えとなるような問いの主語は、(16a) の *este hombre*（この人）、*él*（彼）、*ese tío*（そいつ）、*Juan* のように、必ずヒトに言及したものになることから分かる。また、(16a)の答えの *pintor y padre de dos hijos*（画家で二人のこどもの父親）からは、同一のヒトが同時に複数の「人」を表す名詞によって叙述されることも分かる。これは、例えば、同じヒトが *"Es alto y simpático* 彼は背が高くて感じがいい" のように複数の形容詞で叙述されるのと同じ現象である。確かに、(16b)のように、「人」を表す名詞が正体不明の対象の正体を問う文の答えとして出現することもあるが、そのような場合の「人」を表す名詞には「物」を表す名詞と同じく限定詞の付加が義務的になり、意味も（16a）とは全く異なったものとなる。つまり、(16b) の *un pintor*（画家）が言及するのはもはやヒトではなく、画家の特徴を模したモノ、例えば、画家を描写した絵・写真や画家をモデルにした彫刻・オブジェということになるのである。

ところで、「人」を表す名詞が持つ同じカテゴリーに属す対象同士を区別するという機能は形容詞

の機能と共通するもので、そこからは「人」を表す名詞と形容詞との機能的類似性が窺われる。実際、この「人」を表す名詞と形容詞の機能的類似性は上で見た“*Es pintor y padre de dos hijos* 彼は画家で二人のこどもの父親だ”と“*Es alto y simpático* 彼は背が高くて感じがいい”の間に見られるだけではなく、以下のような、「人」を表す名詞の統語的振る舞いからも確認できる。

(17) a. Juan es muy/*mucho abogado. (Contreras 1996:142)
フアンはすごく弁護士だ。
b. Y sobre todo ¿quién es más padre? ¿el biológico, el que se ocupa de la educación y manutención, ambos? (http://www.avanceemprendedor.com/san-jose-san-jose/)
で、特に、どちらがより父親ですか。生物学的父親、それとも、教育と養育の世話をする父親、それともどっちもですか。

(17a) の *abogado*（弁護士）は形容詞を修飾する副詞の *muy*（とても）とは共起するが、名詞を修飾する形容詞の *mucho*（多くの）とは共起しない。また、(17b) では、*padre*（父親）の前に *muy* の比較級である *más* が置かれている。このように「人」を表す名詞が程度を表す副詞と共起するという事実は、それが同じく程度を表す副詞と共起する形容詞と統語的に類似したものであることを明示するものである。

以上、無冠詞の「人」を表す名詞は「対象弁別性」を欠き機能的には形容詞に類似したものであることを見たが、それに限定詞が付加されると、次のように、「物」を表す名詞と同じく「対象弁別性」を持つことになる。

(18) (=11)	¿Quién es Juan? —— フアンって誰。	a. Es el marido de Pili.	ピリの夫だ。
		b. aquel tío alto.	あの背が高い奴だ。
		c. un vecino.	お隣さんだ。
		d. un médico.	医者だ。

つまり、限定詞が付加された「人」を表す名詞は、mesa（机）と libro（本）が互いに異なるモノを示すように、同じヒト・カテゴリーに属す対象の中に個体としての弁別を導入し、例えば、*un vecino*（お隣さん）は *un médico*（医者）とは異なる対象として認識されることになるのである[18]。このように考えるならば、「人」を表す名詞が品質形容詞や関係節によって修飾されると不定冠詞の付加が義務的になるのも、これと同じ操作に因るものと考えることができるだろう。

3.2.「人」を表す名詞ともっぱら「人」に言及する形容詞の連続性

さて、「人」を表す名詞が機能的に形容詞に類似するということ、また、それに何らかの限定詞が付加されると「対象弁別性」を持つようになる、ということを踏まえるならば、以下の例が示すように、もっぱら「人」に言及する形容詞に限定詞が付加されると「対象弁別性」を持った名詞として機能するようになるというのは何ら不思議ではないだろう[19]。

(19)	¿Quién es Juan? —— フアンって誰。	a. Es un mentiroso/??un sincero.	うそつきだ / 誠実な人だ。
		b. Es un estúpido/*un inteligente.	愚か者だ / 頭のいい人だ。

ただし、先行研究でもしばしば指摘され、上の例でも明らかなように、「人」に言及する形容詞の「対象弁別化」が可能なのは、その意味がネガティブあるいはポジティブな意味で有標なものに限られる[20]。同様のことは、「人」を表す名詞にもあてはまり、例えば、Fernández Lagunilla（1983）は次のような例をあげている。

（20） a. ?? Juan es un médico. フアンは医者だ。
a'. Juan es un medicucho. フアンはやぶ医者だ。
b. *Juan es un padre. フアンは父親だ。
b'. Juan es un padrazo. フアンは甘い父親だ。 （Fernández Lagunilla 1983:199）

（20a）の *médico*、（20b）の *padre* は、特に、ネガティブあるいはポジティブな意味を持つ語ではない。このことから、（20a）（20b）が示すように、それらはたとえ不定冠詞が付加されても、*"¿Quién es Juan?"* といった特定のヒトを同定する問いに対する答えとして用いられるのでない限り、ser 文の名詞述語となることは難しい。それに対し、*médico* に蔑称辞 –ucho のついた *medicucho*（やぶ医者）、*padre* に示大辞 -azo のついた *padrazo*（子供に甘い父親）に不定冠詞がついた（20a'）（20b'）は、特別な文脈がなくても、それだけで自然な文となるのである[21]。

先にも述べたように、Fernández Lagunilla は「人」を主語とする ser 文の名詞述語における不定冠詞の有無を話者による対象に対する評価の有無に帰していた。確かに、ser 文の不定冠詞つきの名詞述語を観察してみると、Fernández Lagunilla の主張を支持するように見えるものが少なくない。しかしながら、2.2. でも述べたように、*"Quién es Juan*? フアンって誰" のように主語が示すヒトの同定を求めるような文脈においては、特別に話者の主観的評価がなくても不定冠詞つきの名詞述語が出現すること、また、話者の主観的評価の有無とは関係なく、関係節や品質形容詞を伴った「人」を表す名詞述語には義務的に不定冠詞が付加される、ということを考慮するならば、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞になるか否かは、当該名詞述語に「対象弁別性」が要求されているか否かに因る、と考えた方がより実態に即していると思われる。

3.3.「物」を表す名詞の無冠詞化

ここまで、「物」を表す名詞はそれだけで「対象弁別性」があるために、正体不明の対象を同定する名詞述語として不定冠詞とともに用いられるのを見てきた。しかし、このことは「物」を表す名詞が無冠詞で用いられないことを意味するものではない。「物」を表す名詞も「人」を表す名詞と同じように無冠詞で出現することはある。以下の例を参照されたい。

（21） Las afirmaciones más importantes y revolucionarias que se harán en este libro serán citas textuales del más famoso libro de nutrición: Human Nutrition and Dietetics, de Passmore y Eastwood (la edición de 1986). Este ha sido y es libro de texto para los médicos y expertos en nutrición en casi todos los países del mundo durante los últimos 25 años.（CREA Aguilar, Miguel, La dieta vegetariana）
（本書のもっとも重要かつ革新的な点は栄養学においてもっとも有名な本、すなわち、Passmore and Eastwood（1986版）の Human Nutrition and Dietetics を原文どおりに引用していることだろう。これはかつて、そして、今もそうであるがこの25年間世界中のほとんどすべての国における医師そして栄養学の専門家にとっての教科書であった。）

（21）は、ser 文の名詞述語として「物」を表す名詞 *libro de texto*（教科書）が無冠詞で出現した例である。ここで *libro de texto* が無冠詞になったのは、それが *Este*（これ）が指す特定の本、*Human Nutrition and Dietetics, de Passmore y Eastwood*（*la edición de 1986*）の属性を表しているからである。すなわち、この *libro de texto* は一旦「本」とカテゴリー化されたモノを同じ「本」とカテゴリー化された他のモノから区別するための修飾語として機能しているのである。このように、主語が予めカテゴリー化されたモノを示し、「物」を表す名詞述語が当該カテゴリーの下位分類を表す修飾語として機能するときには、その「物」を表す名詞は無冠詞で出現することができる。そのような観点から見るならば、Bosque（1996）が問題視した例 “??*Aquel objeto es mesa* あの物体は机だ” の不自然さも自ずと理解されることになろう。つまり、この文が不自然なのは、主語 *aquel objeto*（あの物体）が *mesa*（机）がその下位分類と認識されるほど十分にカテゴリー化されたモノを示していないことに因るのである。

4．結論に代えて

以上、「人」を主語とする ser 文の名詞述語における無冠詞について見てきた。ここでは結論として、本稿が最初に立てた課題に対する回答をまとめていきたい。

まず、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞の場合と何らかの限定詞がついた場合、とりわけ不定冠詞がついた場合の違いについてである。

2.4. で見たように、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞の場合、その背後には “*¿Qué es ...?* ... は何か（... は何をしている人か）” という問いがあり、当該 ser 文はその問いの答えとして、主語が示すヒトの属性を表すと解釈される。また、このことから、無冠詞の「人」を表す名詞述語は機能的に同じくヒトの属性を表す形容詞に類似したものと考えられる。一方、「人」を表す名詞述語に不定冠詞など何らかの限定詞がつく場合、その背後には “*¿Quién es ...?* ... は誰か” という問いがあり、当該 ser 文はその問いの答えとして、主語が示すヒトを同定する機能を持つということができる。

以上に基づくならば、“*Soy estudiante de español* 私はスペイン語の学生だ ” における無冠詞に疑問を持つスペイン語学習者には、次のような説明ができるであろう。すなわち、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が無冠詞の場合は、“*¿Qué es ...?* ... は何か（... は何をしている人か）” という問いを前提としたものであり、不定冠詞など何らかの限定詞のついた名詞述語になる場合は、“*¿Quién es ...?* ... は誰か ” という問いを前提としたものである。また、「人」を表す名詞述語に関係節や評価を表す品質形容詞が付加されると不定冠詞などの限定詞の付加が義務的になるが、それは、それらが主語の示すヒトをその他のヒトから区別し同定することになるからである。

次に、「人」を主語とする ser 文の名詞述語が「物」の名詞述語とは異なり無冠詞で出現できるのはなぜか、ということについてであるが、それは、次のように考えられる。

3.1. で述べたように、スペイン語の名詞には「対象弁別性」を持つものと持たないものがある。名詞の「対象弁別性」とは、それが示す対象をそれ以外の名詞が示す対象から区別する機能を指すが、「物」を表す可算普通名詞は基本的にこの「対象弁別性」を持つ。というのも、「物」を表す可算普通名詞はどれも、“*¿Qué es esto?* これは何か” といった正体不明の対象を同定するための問いに対する答えとして出現することができるからである。すなわち、「物」を表す名詞は、それが示すモノをそれ以外の「物」を表す名詞が示すモノから区別するためのラベルとして機能しているのである。それに対して、「人」を表す名詞にはそのような「対象弁別性」はない。なぜならば、「人」を表す

名詞が示す対象は、常に、同じヒトというカテゴリーに属すものだからである。言い換えるならば、「人」を表す名詞の働きは、その同じヒト・カテゴリーに属す対象同士を区別することにある。この「人」を表す名詞が持つ同じカテゴリーに属す対象を区別するという働きは形容詞の機能に共通するもので、「人」を表す名詞が無冠詞で出現するのは、ちょうど形容詞が無冠詞で出現するのと並行した現象といえる。一方、「物」を表す名詞が無冠詞になりにくいというのは、「人」を表す名詞とは逆に、それが「対象弁別性」を持っていることに因るのではなかろうか。あるモノが別のあるモノから区別されるためには、当該の二つのモノが互いに非連続的、独立的と認識される必要があるからである。つまり、「物」の可算普通名詞が不定冠詞を伴い、「可算」であるのは、それが非連続的で独立的なモノを示すからということになる。

しかしながら、この「対象弁別性」をめぐる「人」を表す名詞と「物」を表す名詞の違いは決して固定されたものではない。すでに見たように、「人」を表す名詞に不定冠詞が付加されるとそれはあたかも「物」を表す名詞のように、当該のヒトをそれ以外のヒトから区別するラベルとして機能するようになるし、「物」を表す名詞も無冠詞で用いられると、予めカテゴリー化されたモノの下位分類を表す修飾語として機能するようになるからである。

注

* 本稿は2013年8月29日、神奈川大学箱根保養所で開催された日本スペイン語学セミナー（SELE2013）において「Hola, me llamo Hiromi. Soy estudiante/#una estudiante de español. ── 人を主語とする ser 文の名詞述語における無冠詞について ──」という題目で発表したものを修正・加筆したものである。発表時、貴重なご意見、ご批判を下さった方々に深く感謝の意を表したい。ただし、本稿中の誤りおよび不備な点はすべて筆者の責任である。

1 スペイン語には英語の be に相当する動詞に ser と estar の2種類があるが、その補語として名詞句を取ることができるのは ser だけである。

2 以下、名詞述語のうち問題になる名詞句部分は下線を引いて示す。

3 以下、問題となる ser 文の名詞述語の名詞句部分も「名詞述語」と呼ぶ。

4 # という記号は当該文が語用論的に不適切であることを示す。ここでは、（1b）の *Soy una estudiante de español* が不自然なのは、それが *Hola, me llamo Hanako Yamada* に後続していることに因ることを示す。

5 CREA は Real Academia Española のデータベース Corpus de Referencia de Español Actual を指す。

6 以下、本稿で「無冠詞」と言う場合は、名詞句の前に定冠詞、不定冠詞、指示形容詞、所有形容詞等、広く「限定詞」と呼ばれるものがついていないことを指す。

7 周知のように、スペイン語の不定冠詞には複数形があり、それは英語の some に相当する特別の意味を持つ。このような事情から、本稿が扱うのは、「人」を表す主語が単数形の場合のみとすることを予め断わっておきたい。

8 ser 文の名詞述語における「無冠詞」の用法は、特に、英語を母語とするスペイン語学習者にとって習得の難しい項目であることから、先行研究もそのような観点から書かれたものが多い。しかし、本稿ではそのような先行研究は必要と思われたとき以外扱わない。

9 Fernández Lagunilla（1983:196-197）によれば、Bello は ser 文における無冠詞と不定冠詞について次のように述べているという。“El artículo indefinido da a veces una fuerza particular al nombre con que se junta. Decir que alguien es *holgazán* no es más que atribuirle este vicio; pero decir que es

un holgazán es atribuírselo como cualidad principal y característica. 不定冠詞はそれといっしょになる名詞に特別の効力を与える。誰かが *holgazán*（怠け者）というのは単にその人物にこの悪癖を付与するだけだが、その人が *un holgazán*（怠け者）というのは彼にその悪癖をもっとも重要で特徴的な特性として付与することである。”（Bello 1847:285）

10 この文の ?? という記号は Fernández Lagunilla（1983）に従ったものである。

11 本稿は Bosque（1996:57）の原文通りに引用したが、この部分は este hombre に修正すべきである。

12 “*¿Qué es este hombre?*” に対する「この人は何か」は文字通りの直訳。括弧内の「この人は何をしている人か」は自然な日本語に訳したもの。以下、同様。

13 関係的形容詞は個体の下位分類を表すという意味的特徴のほかに、対象の属性を表す品質形容詞とは異なり、muy（とても）、más...（より ...）といった程度を表す副詞とは共起しないという統語的特徴も持つ。

14 Bosque（1996）の指摘した関係的形容詞と ser 文の名詞述語における無冠詞の関係については、とりわけ、「人」が主語の ser 文において顕著になる。例えば、スペインを検索領域として CREA で行った検索によると、“*es padre de...*”（〜は ... の父親である）と “*es un padre de...*”（〜は ... の父親である）のヒット数はそれぞれ27件と 0 件であり、無冠詞の “*es padre de...*” の *de* に後続したものを見ると、18件が *dos hijos*（二人のこども）のようなこどもの数を示すもの、3 件が「家長」と言う意味の “*es padre de familia*”、3 件が “*es padre de Ana*”（アナの父親）のようなこどもの名前、残りは “*es padre de nuestra patria*”（我々の祖国の父）のような比喩的表現であった。

15 実際、CREA でスペインを対象領域とし “*Quién es usted* あなたは誰ですか” を検索してみると、以下のような不定冠詞つきの名詞述語がヒットした。¿ Quién es usted ? --- Un paisano. あなたはどなたですか。--- 同郷の者（だ）。（Vázquez Montalbán, Galíndez, 1990）

16 本稿が対象とする「物」を表す名詞は libro（本）、mesa（机）のような可算普通名詞である。

17 agua（水）、dinero（お金）のような不可算名詞の場合は除く。

18 長沼（2010: 124-125）で引用された Picabia（2000）は、フランス語の無冠詞の名詞述語と不定冠詞つきの名詞述語の違いについて次のように述べている。

“ a. Paul est Français. ポールはフランス人だ。
b. Paul est un Français. ポールはフランス人だ。

「もしポールがフランス国籍を持っていることを話者が主張したいのであれば、そのときは a が期待される文である。しかし、ポールがアメリカに移住し、そこで、例えば、バスク風のベレー帽、バゲット、フランス産のチーズやワインなど、フランス人の典型であると想像される特徴を示すとすれば、そのときは b が自然と期待される文である。」” 本稿の「「人」を表す名詞に限定詞が付加されると「同じヒト・カテゴリーに属す対象の中に個体としての弁別が導入される」というのは、この Picabia の説明にあるように、当該のヒトが他のヒトとは異なるものとして認識されるために、その特徴に焦点があてられるようになることを意味する。

19 「もっぱら「人」に言及する形容詞」というように「もっぱら」という副詞をつけたのは、alto（高い）、bajo（低い）、grande（大きい）のように「物」にも言及することができる形容詞は不定冠詞を付けても名詞述語を形成することは難しいからである。ただし、それらが定冠詞と共に名詞述語を形成することは可能である。*Juan es un alto. フアンは背が高い人だ。Juan es el alto. フアンはその背の高い人だ。（Fernández Lagunilla 1983: 203）

20 Fernández Lagunilla（1983:203）は、不定冠詞と共に「対象弁別化」が可能な形容詞として次の

ようなものをあげている。tonto（馬鹿な）、desgraciado（不幸な）、miserable（哀れな）、valiente（勇気のある）、desdichado（不運な）、egoísta（わがままな）、malvado（悪事をはたらく）、impertinente（生意気な）、insolente（無礼な）、desvergonzado（恥知らずの）、ingenuo（無邪気な）、bendito（お人好しの）、inepto（無能な）、antipático（感じが悪い）、solitario（孤独な）。

21 CREA を用いた検索によると、次の「人」を表す名詞は、そのポジティブあるいはネガティブな意味からもっぱら不定冠詞つきで用いられる。括弧内はスペインを対象領域とした際のヒット数。es un héroe(37) /héroe(3).（～は英雄だ）es un genio(50) /genio(2).（～は天才だ）es un asesino(34) / asesino(1).（～殺人者だ）

参考文献

Alonso, Amado（1933）: “Estilística y gramática del artículo en español”, en A. Alonso（1974）, *Estudios lingüísticos. Temas españoles*, 125-160, Madrid: Gredos.

Bosque, Ignacio（ed.）（1996）: *El sustantivo sin determinación. La ausencia de determinante en la lengua española*, Madrid: Visor Libros, S.L.

――― （1996）: “Por qué determinados sustantivos no son sustantivos determinados. Repaso y balance”, en I. Bosque（ed.）（1996）, 13-119.

Contreras, Heles（1996）: “Sobre la distribución de los sintagmas nominales no predicativos sin determinante”, en I. Bosque（ed.）, 141-168.

Fernández Lagunilla, Marina（1983）: “El comportamiento de ‘un’ con sustantivos y adjetivos en función de predicado nominal. Sobre el llamado ‘un’ enfático”, en *Serta Philologica F. Lázaro Carreter*, 195-208, Madrid: Gredos.

Laca, Brenda（1999）: “Presencia y ausencia de determinante”, en I. Bosque & V. Demonte（eds.）, *Gramática despcriptiva de la lengua española*, Vol. 1, 891-928, Madrid: Espasa-Calpe.

Lapesa, Rafael（1974,1975/1996）: “El sustantivo sin actualizador en español”, en I. Bosque（ed.）（1996）, 121-137.

Leonetti, Manuel（2012）: “Indefiniteness and Specificity”, en J.I. Hualde, A. Olarrea y O’Rouke, E.（eds.）, *The Handbook of Hispanic Linguistics*, 285-305, Blackwell Publishing Ltd.

Lipski, John M.（1978）: “On the Use of the Indefinite Article”, *Hispania* 61, 105-109.

Morimoto, Yuko（2011）: *El artículo en español*, Madrid: Edhasa［Castalia］.

Picabia, Lélia（2000）: “Appositions nominales et détérminant zéro: le cas des appositions frontales”, en *Langue française*, nº 125, 71-89.

Sánchez de Zavala, Víctor（1976）: “Sobre una ausencia del castellano”, en *Estudios de gramática generativa*, 195-254, Barcelona: Labor.

Velleman, Barry L.（1979）: “Neutro, colectivo e identificación de masa”, *Nueva Revista de Filología Hispánica*, XXVIII, 2, 306-312.

長沼圭一（2010）:「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」『愛知県立大学紀要　言語・文学編』42, 113-135

資　料

REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos（CREA）［en línea］. *Corpus de referencia del español actual.* <http://www.rae.es>［アクセス日 2013年８月１日から８月26日］

Sobre la ausencia del artículo en el predicado nominal

—— con especial atención a la oración copulativa cuyo sujeto es la persona ——

Hiromi YAMAMURA

En las clases de español se explica normalmente que no se añade el artículo indeterminado ni determinado ("el determinante" en general) al predicado nominal que denota profesiones, ocupaciones y otras características de las personas como se demuestra en *Soy estudiante de español*. Sin embargo, en el español real no pocas veces se encuentran oraciones copulativas donde se añade el artículo indeterminado al predicado nominal en cuestión como *Este hombre es un escritor*.

El objetivo de este artículo es doble: por una parte, aclarar qué diferencia hay entre el predicado nominal sin artículo y el predicado nominal con artículo para proponer, luego, un método efectivo para que los alumnos entiendan mejor dicha diferencia, y por otra parte, averiguar las razones por las que es posible la ausencia del artículo en el predicado nominal que denota profesiones, ocupaciones y otras características prototípicas, mientras que es muy difícil en el predicado nominal que denota cosas como se comprueba en ??*Aquel objeto es mesa*. Las conclusiones se resumen como sigue:

- El predicado nominal sin artículo informa sobre la propiedad que se asigna a la persona expresada por el sujeto, mientras que el predicado nominal con artículo identifica a la persona en cuestión.
- Para que los alumnos de español entiendan mejor dicha diferencia, es necesario hacerles darse cuenta de que el predicado nominal sin artículo podría ser una respuesta a la pregunta *¿Qué es la persona expresada por el sujeto?*, mientras que el predicado nominal con artículo podría ser una respuesta a la pregunta *¿Quién es la persona expresada por el sujeto ?*
- Entre los nombres comunes de persona y los nombres comunes de cosa hay una diferencia en cuanto a la capacidad de distinguir un objeto denotado por el nombre en cuestión de los otros objetos denotados por los otros nombres. Los nombres comunes de cosa sí tienen tal capacidad porque el nombre "libro" denota un objeto bien distinto del objeto denotado por el nombre "mesa", por ejemplo. Los nombres comunes de persona, en cambio, no tienen dicha capacidad, ya que todos los nombres comunes de persona denotan el mismo objeto categorizado como "ser humano", de ahí que cada uno de ellos funcione por decirlo de alguna manera como calificativo que sirve para distinguir un ser humano de otro ser humano. Esta característica calificativa que comparten los nombres comunes de persona con los adjetivos les capacita para aparecer sin artículo.
- La capacidad que tienen los nombres comunes de cosa de denotar un objeto bien distinto de los otros objetos tiene mucho que ver con la presencia del artículo indeterminado en el predicado nominal de cosa porque, para que un objeto denotado por el nombre en cuestión se considere distinto de otro objeto denotado por otro nombre, es necesario que los dos objetos en cuestión se reconozcan discontinuos mutuamente. Esta discontinuidad hallada en los nombres comunes de cosa facilita la presencia del artículo indeterminado y dificulta la ausencia del mismo en el predicado nominal de cosa.